

和服の肩幅・後幅の寸法差の縫製上における縫い代の安定と形態について  
 東京家政大家政 井上好 知野恵子 神田和子 藤本やす

### 目的

平面構成における縫い代の安定は、和服の仕立てに大きく影響する。和服本来の考えのもとに（縫い代を切り落すことなく）縫製処理を行う場合、従来の肩幅・後幅の寸法差では、個人に適合した寸法をとることが不可能な場合がある。今回は、絹織物と合繊織物（ポリエステル）を用いて、前回同様の肩幅・後幅の寸法差で実物製作を行い、なじみ具合を検討し、綿織物・絹織物を用いて着装上の形態を考察する。

### 方法

絹織物の平絹・綸子・合繊織物の平絹・綸子を用いて、脇縫い代6cm・袖付け23cm・身八つ口15cm・肩幅と後幅の寸法差を3cm・4cm・4.5cm・5cmの4種類とした。脇縫い代のきせを0.2cm、肩山での袖付け縫い代を0.5cmで縫製し、縫い代と身頃とのなじみ具合を検討した。なお、編木綿・綿紬・縮緬を用いて上記の寸法により実物を製作して着装し、袖付け点における袖山・肩山の形態について考察する。

### 結果

今回用いた布地は、予想以上に伸び率がよく、絹織物と合繊織物共に前回の綿織物よりも容易に縫い代を身頃になじませることができた。肩の伸び率の最も少ない絹織物の紐で差5cmの場合、身八つ口止まりより10.3cm下までになじませることができた。また、形態上から検討した結果、袖山・肩山の袖付け点における形態は、着装してみた結果、肩幅と後幅の寸法差が5cmの場合でもさほど不自然ではなかった。